

## 教養文化研究所講演会記録：絵の中の人生

著者名(日)	太田 治子
雑誌名	駿河台大学論叢
号	34
ページ	116-138
発行年	2007
URL	<a href="http://doi.org/10.15004/00001055">http://doi.org/10.15004/00001055</a>



## 2006年度教養文化研究所第2回公開講演会報告

教養文化研究所長 本 間 邦 雄

実施日時：11月4日(土)13時30分～15時20分

講 師：太田 治子(おおた・はるこ)氏

題 目：絵の中の人生

場 所：本学7405教室

11月4日(土)午後1時半より、作家の太田治子氏による講演「絵の中の人生」が、教養文化研究所主催による本年度第2回目の公開講演会として実施された。周知のように、太田治子氏の父は太宰治であり、母は『斜陽日記』の太田静子である。太宰のベストセラー小説『斜陽』ゆかりの娘として、太田治子氏の青春期は、代表作『心映えの記』(第一回坪田譲治文学賞受賞)に描かれている。

太田治子氏は、NHK教育テレビ「日曜美術館」の初代司会アシスタントを務め、海外の多くの美術館も探訪し、その豊富な経験をさまざまな著作に結実させている。おもな著書に『私のヨーロッパ美術紀行』、『万里子とわたしの美術館』、『絵画の楽しみ方ガイド』、『天使と悪魔』、『恋する手』などがある。

講演者は、「日曜美術館」の司会アシスタントを務めた頃の経験から語りはじめた。夭折の画家・関根正二を語った今東光の思い出から、恵まれない環境にもかかわらず、絵筆をとり、絵の具を塗るときの画家の幸福に焦点が注がれる。ゴッホやゴーギャンの画業、そしてその交友・家族関係などが、氏特有の聴衆を魅了する語り口によって自在に語られる。後半では、氏は竹久夢二の絵のなかの、黒猫を抱く女性の手の大きさに着目する。その黒猫が夢二自身であり、それを抱く女性の手は母親の手であること、そしてそのことは、ダ・ヴィンチのモナリザの手にも通じる点が指摘された。

めまぐるしく移り変わり、多忙な毎日の現代世界にあっても、そのなかで、変わらぬもの、心の糧がいっそう求められている時代である。気持ちのゆとり、心の豊かさを大事にしたい思いは、老若男女を問わず、だれにも共有されているものである。

当日は土曜日ということもあって、一般の参加者が多く、250名ほどの熱心な聴衆が時を忘れて聞き入っていた。太田治子氏は、会場からの質問にも当意即妙に答え、午後3時20分過ぎに講演は終了した。その後も演壇前に多くの方々が集まり、講演者を囲んで写真撮影を交え、名残を惜しむように歓談がつづいた。芸術の秋にふさわしいひとときであった。

## 絵の中の人生

太 田 治 子

太田 今日(けふ)は池袋から特急で飯能まで来ましたが、大変近いんですね。山も間近に迫っていて、とてもいい所です。私も八王子の教室で長くエッセー教室を持ってましたし、また11月から八王子のNHK文化センターで「明治・大正・昭和のベストセラーを読む」という講座が始まりましたし、うちは小田急沿線なんですけど、八王子まではとても身近に感じています。飯能はそこからとても距離が近く、こんなにいい所でお会いできて、いい所にお住まいでらっしゃって、うらやましい気がします。



私は世田谷ですから、山は見えるのですが、とても小さいのです。富士山もホオズキのように小さく見える。やはり山はある程度大きく間近に見えないと物足りない気がします。だから、山がこんなに間近な、本当にいいところだなと思います。

今日は「絵の中の人生」ということで、絵のことをおしゃべりさせていただきます。文学のことをお話するというと、私もちょっと構えた気持ちになるところもあるのですが、絵というのは不思議ですね。絵のことをおしゃべりするというのは、文学のおしゃべりという、ちょっと構えたようなこわばりというものがないで、うまくお話しできるかどうかというその心許なさとは別に、うれしい気持ちになるのです。思わずにっこりとしてしまう。

文章を書くときはにっこりとしては書けませんし、この中に絵をお描きになる方もいらっしゃると思うのですが、絵もにっこり笑っては描けないと思いますが。私は小さいとき絵描きさんになりたかったんです。今日、本間先生にきれいなパンフレットを作っていただいて、紫のきれいなチューブが塗られて、パレットにもきれいな色がありますけど、やはり7色の虹を紡いで、それが描いているときはとても苦しくても、芸術作品を生み出す。今はコンピューターグラフィックで絵を描く時代でもありますけれども、やはり私はチューブを絞り取って、チューブからいろんな色がにじみ出てきたり

合わせたりして、絵を描くすばらしさというものはずっと永遠に続いていただきたいなと思います。

いろいろと勘違いすることも多い女なものですから、NHKの「日曜美術館」で司会アシスタントとしてまだ数カ月のときに、関根正二という、福島県出身で20歳で亡くなった夭折の画家の絵を今東光さんがお話しになったことがあったのです。今回、文化勲章を受章された瀬戸内さんのお師匠さんの今さんです。

今さんと関根正二という夭折の画家という結び付きも私にとっては全く予想外でした。今さんというと毒舌和尚で口の悪いという方ですよ。その方が、ご自身も絵を描きたい方だったと。そして、下町の画塾で関根正二という画家と同年配同士仲良しになった。

ブリヂストン美術館にその関根正二の「子供」という、赤い服を着た子どもの絵があるのです。その絵も私は大好きで、どういう画家かも知らずにブリヂストンに行ったときに、その少年に初めて会ったのです。赤い服を着て、金髪の髪の毛をしているように見えた。その洋服の赤はバーミリオンという絵の具で、本当にその赤が輝いて見えたので、私は「ああ、この人はすごい幸せな人で、お金持ちのお坊ちゃんで、大正期から昭和の初めにパリに留学して、そのパリの下宿先の子どもを描いたんだわ」と思っていました。

関根正二の名前を知らなかったのです。それで、赤が輝いている、たっぷりとしたこの赤の絵の具を使える、本当に心も豊か、お金も豊かなおぼっちゃま、幸福な王子が描いた幸福な少年の顔と思って、手帳に「関根正二、子供」とメモしました。

そうしたところが、それから数カ月たって「日曜美術館」に今さんが出てお話しになった。その「子供」の絵のお話をしたら、「いや、とんでもない」と。今東光さんは青森の旧家のおぼっちゃまですからお金にも恵まれていたのですが、関根正二は福島の瓦職人、瓦ふきの職人さんのぼっちゃんですけど、とてもとても貧乏で、本所深川に住んでいたのですが、着物のへこ帯も買うお金がなかった。だから、いつも荒縄を締めていたと。

私が幸福な王子の描いた幸福な子どもの絵と思ったのは、実は深川の子どもだった。人によるとそれは正二の弟ではないかという説もあるのですが、いつもはそのバーミリオンという赤い絵の具を使えなかった。関根正二と今東光さんが一緒に描いていると、ちょっとパレットに絵の具があると、しゅっしゅっと随分失敬されたものだよと。

そのとき初めて、バーミリオンというその赤い絵の具をたっぷりと使うことができた。「この絵があなたの目に幸福に輝いて見えるとしたら、それはその時正二がうれし



かったんですよ」と言われて、私はあまりに自分が考えていたことと現実が違うのでびっくりしました。

その正二という人は、そういう荒縄のような帯を締めていたのですが、やはり同じ画家と一緒に勉強している田口真咲さんという、今東光さんもあこがれていた美少女を好きになったのですが、問題にされないのです。一緒に蓄のう症の手術も受けて、そのあと、自分が退院してから献身的に彼女を看病したのです。人生思うようにいかないもので、一生懸命になればなるほど嫌われていたのです。

そして、残念なことに、関根さんのほうがずっと真咲さんを好きな心が本物だったのに……。東郷青児さんとおっしゃる方をご存じだと思います。新宿に東郷青児美術館があります。あのきれいな90歳でいらした宇野千代さんとも同棲されていたことがある、やはりそういう夢見るきれいな女性を描いた方です。私もお会いしたことがありますが、晩年までご活躍で。真咲さんはその方を好きになった。でも東郷さんは大変おもてになる方ですから、真咲さんをふってしまったのです。

真咲さんは大阪の人でしたので、胸の病に冒されて帰るときに、もちろん東郷さんは見送りに行かなかったと思うのです。関根は行きたかったけど、自分はいけない。そのももんたる思い、ふられた少年としての寂しさと悔しさと、でも真咲さんのこれからの幸せを願う気持ち、いろんな気持ちの中で、彼もまた病で倒れてしまうのです。

そういう悲しい人がどうしてあんなに、何も知らない人間が見て幸福な少年の肖像を描けるのだろう。私は自分が知らなかったことを恥ずかしいと思う以上に、画家の幸せというのは何なんだろうかと。この苦しみを文章にして、しかもそこに幸福感をたたえることはとても難しいと思います。でも、絵の場合は、貧乏な中で、苦しい中で、バミリオンという絵の具をたっぷり使えたという、その喜びであのように幸せに輝く絵を描くことができるんだと。ああ、絵描きさんになりたかったと、そのお話を今さんから聞いた後で思いました。

今さんはそのとき、「俺はもう死んで残らねえけれど、関根正二の絵は残るよ」と言って涙ぐまれました。もうそのとき、がんでいらっしゃったのですが、それから1年後にお亡くなりになられたのです。今さんというと、毒舌な、ちょっと私なんかも苦手とする方のように思っていた方ですが、そのような方が実はそういう、関根正二という夭折の画家、早く死んでしまったお友達をずっと思っていて、「関根正二の絵は残るけど、俺は残らねえ」とはっきりと言われた。その今さんもすてきな方だったと思います。

私はその関根正二を思うと、やはりどうしてもゴッホにつながるものを感じます。生き方も、それから絵も。関根正二の絵はゴッホというよりは日本のデューラーと土方定

一さんという方がおっしゃっています。デューラーというのはドイツの画家です。ちょうどプロテスタントの勢いが強まってきたころ、ローマ、イタリアにも行きましたけれども、そのずっとあとはドイツで絵を描き続けた。やはり悩み深い人であったのです。

その人の絵は、デッサンがもうとても上手でした。私も小学校のときに、今にもウサギが走り出すようなきっちりとした線の中に生き生きとした絵をみてすてきだなと思いました。ただ、やはりドイツの画家ですから、イタリアに留学したときの絵の女性は柔かいのですが、ドイツに帰ってからの女性を描くときは少し硬い感じになる。ドイツ的なのかもしれません。デューラーのその硬さも、なぜか関根正二のデッサンとかある人物像なんかにとっても通ずるものがあります。

そのデューラーが非常にまじめな悩み深い人であったように、関根正二は、パリにも行くこともなく、極貧のまま、悲しみの中で息を引き取ってしまったのです。でも、パリに行った人以上にパリの的であり、ましてやドイツにも行ったこともないのに、デューラーの絵に似ている。

今、東京芸大のご卒業生がいらっしゃったら申しわけないのですが、東京芸大というのは一つのあこがれの象徴ですが、でも東京芸大を出たら立派な画家になるという保障はどこにもないわけです。むしろアカデミックなお勉強をされると、自由な絵を描くということが、かえっていろんな理論とか知ってしまうと難しくなる、考え過ぎてしまうところがあるかもしれません。

その点、関根正二のようにほとんど独学というか、デッサンの勉強はしましたけど独学でやられた方というのは、逆の強さがあります。そういうアカデミックな勉強というものは何なんなのだろうか。芸術の自由さとアカデミックなことというのはどうなんでしょうね。かえって難しくなるところがあると思います。

ゴッホも、やはりゴッホでなければ描けない絵を描いた。今どんな絵がすばらしいかなと思うと、その人でなければ描けない絵を描いたもの。今の現代絵画は、例えばこれからお話ししますモナリザの絵にひげを描いたマルセル・デュシャンはモナリザをおちょくった。そういうくすぐりであり、皮肉であり、そしてときには、今、ダリ展をやっているけど、ダリをお好きな方には申しわけないですが、ダリはやはり悪い夢ですよ。ルネ・マグリットが現代画家の中で好きなのは、悪魔であってもきれいな絵。ダリはちょっと、私にとっては怖い、悪い夢を見た後味があるのです。でも、現代絵画は、むしろ人をちょっと不快にさせたり、驚かせたり、そうすることでそれが新しい芸術の一つの姿だと考えているところがあると思います。

版画家の池田満寿夫さんは、10年以上前にお亡くなりになりましたけれど、感じの

いい方です。私が一つショックだったのは、晩年の池田満寿夫さんとお話ししたとき、池田さんが「レンブラントの絵はどこがいいんでしょうね」とおっしゃって、私はすごく寂しい気がしました。現代画家がレンブラントと同じ絵を描いても、全然評価されない。でも、こういうこともおっしゃった。「レンブラントで完結しているのは、もうそれ以上レンブラントを超えることはできない」というのは池田満寿夫さんの言葉でしたけれども、そのとおりだと思います。でも、だからといって、そういう、過去に描いた画家の絵をおちよくったり、それに手を入れてこれが新しい絵だというのは、ちょっとずるいんじゃないかと私は思います。文学でもそうです。人の資料とか、人が書いたものをちょっと変えて現代文学だとなっている場合があるけど、私はそれはちょっとずるいのではないかと。

私が好きな絵は、好きな芸術というのは、やはりその人でなければ描けない絵です。だから、ゴッホの絵はまねしようと思ってもゴッホにしか描けない。関根正二の絵は未完だとおっしゃる方もいますが、20歳に描いたあの関根正二の絵は、未完であるかもしれないけども、それは未完ではない。あの時点で完成した絵だと思う。

その田口真咲さんのことを描いた「信仰の悲しみ」、本当にうなだれて悲しみが伝わってきます。東郷青児さんにふられて、そして胸を悪くして大阪に帰る新幹線のホームの真咲さんを思いつつ関根正二が描いた絵は、とても悲しい真咲さんの顔です。私は東郷青児さんが「日曜美術館」に出られたときに、真咲さんのことをお聞きして、「蒲柳の質で細い方だったんでしょう」と言ったら、「いや、そうでもない。あんたぐらいの肉付きだったよ」と言って笑われた。私もそう太ってはいませんが、やせぎすではないです。蒲柳の質とは言えない方だったのだと思いました。

東郷さんはとてもおもてになる男性でいらっしゃいましたから、東郷さんにとっては真咲さんは、通り過ぎていったワン・オブ・ゼムであったんでしょう。でも、関根正二にとっては、やはりたった1人の女性だった。でも、やはり人間って思うようにいかないですね。そういう人には心が入っていかない。「こんなにあなたのことを思ってるんだから、あなたも、東郷さんのようなハンサムではなくて、関根さんのような実のある人のほうがずっといいんだから」といくら周囲が言っても、嫌なものは、やはりその気にならないものは仕方がないですね。

それはゴッホの場合にもあると思うのです。関根さんも心熱き人ゆえに、そうやってすばらしい才能プラスやはりお人柄がよかったからこそ、今さんもずっと亡くなるまで、正二、正二と思い続けていた。心映えのいい方だったように思います。ゴッホも似ているとしたら、やはり心がとても熱い人だったのです。だれかを好きにならずにはいら

れないというのがゴッホの生き方だったと思うのです。愛さずにはいられないという。

ゴッホは、皆様もご存じだと思いますけれども、かわいそうな女性を好きになるのです。ここがすばらしいところです。恵まれた幸せなお嬢様に心が行くというのではない。そこがちょっと寅さんと、似たところもあるのですが、似ていないとしたら、寅さんはマドンナにあこがれますけども、ゴッホの場合は、マドンナとして寅さん以外の多くの男性からもあこがられるような女性ではなくて、ほかの人から見たら「何だ、これは」というような、例えば娼婦のシーン。もう娼婦と聞いただけでかわいそうだとゴッホの胸はいっぱいになる。

娼婦もいろいろですよ。本当にかわいそうな、逆境の中でも美しい心を持ち続けたと思う、そういう娼婦もいる一方で、しこたまもうけてやろうと思ったり、結構ちゃっかりした娼婦もいる。これは奥様という名のもとにでも、清らかな奥様もいる一方で、いじわるな奥様、ずるい奥様もいますから、どの職種であっても、どの立場であっても、皆同じだと思います。

ゴッホのかかわった娼婦のシーンは、しこたまゴッホからかすめ取ってやろうと、だましてやろうという、そういうずるい娼婦だったようです。ですから、ゴッホは、もう娼婦でも構わないと。かわいそうな人だから僕が結婚して守ってあげなくてはという気持ちで共同生活を始めたところ、ゴッホの子でもないのにおなか膨れてきて、それをまたおろおろと面倒を見る。ゴッホは家族愛には大変に恵まれていた人ですから、弟のテオという画商が、そういうゴッホを見るに見かねて「お兄さん、いいかげんにしたほうがいいよ」と言っても、とことんだまされないと目が覚めないというか、そういう一途さがあります。

ゴッホは牧師さんの息子でした。今度は、いとこで親戚じゅうで一番かわいそうな、ご主人を早くなくされて、男の子を持って出戻ってきた女性という、もうそれだけでやはりまた心が熱く、かわいそうだという気持ち、憐憫の情ですね、それがすぐに恋に変わるのです。そして、「僕と結婚しましょう」と。

「僕のこの情熱、僕のあなたに対する一途な思いはこういうものです」と言って、ろうそくの中に手を突っ込んで見せる。そういうことをされると、女性たるもの、ますますびびって怖いですよ。お話を聞くと、ゴッホというのはそこまで一途に思い詰めるんだ、かわいそうな、いじらしい、すばらしい人だと思うけど、現実にはその女性の立場になったら、「僕のあなたへの思いはこのとおりです」と言って、手のひらを燃えさかるろうそくの炎の中に突っ込んだりすると、やはり引きますよね。

かえってそういうふうに突進して、思いが濃いということを赤裸々に言うことで、女



性が引く。そのことに気付かないほど、純な、正直な人です。これだけ熱い気持ちで思っているということを、私たちがゴッホの立場でそういうことを直接に全部出すことにはためらいがある。しかも、相手はどうもそれほど思っていない場合だったら、「やはりやめておきましょう」と自然に思うものなのですが、ゴッホはもう、それこそ突進してしまう。その熱情ですね。

ゴッホは牧師になりたいと思って、牧師になるからには、単にお祈りを美しい教会の中でするのではなくて、お父様がプロテスタントの牧師さんでしたので、自分も牧師になるためには自分もオランダの炭坑で一緒に働いて、それからジャガイモを植え付けしているそういう農民の手伝いをしながら一緒にお祈りをする。すばらしい人です。高みからお説教するのでは絶対なくて、一緒になって働く。

それはすばらしいことなんだけど、かえってそういう人が1人いると、例えば農作業をしているときも、ゴッホは絵に対してはすばらしい才能があったけど、多分、農作業をするのはあまり上手ではなかったのではないかと思います。それと、そんなに体も丈夫そうではありませんから、急に炭坑してもやはり無理があります。そういう人いますよね。お引越しの手伝いに来て、すぐに1人、「あいたたた」とか。そういうふうになると、ご厚意はありがたいと思っているけども、かえって「この方、来なくてよかったのにな」と内心思いつつという場合があるように、ゴッホもそうだったと思います。

でも、そういう目で見られているということに気付かないほど、彼は純な、いい人なのです。人間ってままだらないです。そういういい人は生きづらいのです。生きるのが損な人っていますね。要領良くできない。そして、人がどう思っているかということなんか考えないでひたすら自分の思いが熱くなる。何とか僕の力で人を助けたいと。

そういう人ゆえに、非常に不器用な生き方になっても、描く絵はあふれる愛がそのまま絵筆にこもってますから、すばらしい絵。ほかの人とは比べものにならない、私などとは比べものにならない心が熱い人だったゆえに、カンバスに向かうと7色の虹の絵の具からすばらしい絵を描くことができたのです。

だから、皆様もご存じのようなあのポール・ゴーギャン、タヒチに行った、彼に対して本当に恋人を迎えるようにして、アルルの黄色い家で一緒に絵を描きたいと切望した。結局、ゴッホは貧乏であっても、テオが画商をしていましたし、応援することができたから、何人もの画家に「ぜひ一緒に共同生活しましょう、貧乏な友よ」とラブコールしたのですが、みんな、ゴッホのその熱情にはほとんど迷惑のところもあったでしょう、だれもそれをお受けしなかった。

その中で、ゴーギャンは非常に男らしい強い人だったのです。だから、ゴーギャンは



それを受けた。ゴッホはもうこの黄色い家で、この椅子にはゴーギャンが座るということを夢見て、本当に恋人のようにゴーギャンが来るのを待っていたのです。それはいいらしい気持ちで。

それが、「民藝」でお芝居になりました。滝沢修さんがゴッホになり、ゴーギャンは芦田伸介さんが付け鼻をして出て、ちょっと違和感があったように思います。でも、滝沢さんのゴッホはすばらしかったと思います。その一途さが伝わってきました。日曜美術館の「私とゴッホ」は今なき滝沢修さんが語ってくださったのですが、滝沢さんは本当にゴッホがお好きで、オランダでゴッホの絵を見たとき、絵の前で思わず「おお」と大きい声を上げてしまったとおっしゃっていました。ゴッホの絵はそういう何か人をぐいぐいと引き付ける、身近なものにさせる、そういう力があるのです。

ゴッホがそれだけ待ち望んでいたゴーギャンなのに、そのゴーギャンがやはり一緒に生活していけないという気持ちになったのも、それもよくわかる気がします。やはり2人とも芸術家で、大変個性が強い2人が一緒に住んでいたら、ぶつかって当然だと思うのです。それで耳切り事件、ゴッホが自分の耳を切ることが起きてしまって、もうゴーギャンはアルルを去った。そのことがとてもショックで、ゴッホ自身、また自らの命を絶つことにつながっていったと思うのです。

ただ、私はゴーギャンに関してもすごく誤解していたことがあった。サマセット・モームというイギリスの作家の「月と六ペンス」という長編小説があるのです。ゴーギャンは妻子を捨てて、タヒチに行って、そして思い切り野蛮人になって絵を描いた。家族の目から見たら無責任な男ということになっています。一人の作家の片寄った見方が、真実ということになってしまう。

日曜美術館の第1回が「私と礫山・萩原守衛」で、第2回だったと思うのですが、詩人の大岡信さんがゴーギャンを語られることになって、そのとき私は参考資料としてゴーギャンの生涯の本を何冊か読んだのです。ゴーギャン自身も本をいくつか書いています。

そうしたところが、現実とは違って、ゴッホとは違ってゴーギャンは家族を持つことができ、40歳までは株式仲買人という、これはホリエモンの仕事にも通じることですが、もう芸術とはおよそ縁遠い。とてもそこはゴッホとは違って世渡り上手で、お金もうけが上手で、非常に女性からも好かれて、ゴッホも夢中になるぐらい男性からも好かれる。そういうとても魅力あふれる豪快な感じのいい男だったようです。

世渡り上手だからこそ、40歳まで日曜画家として、平日は株式仲買人として忙しい日々を送ってますから、パリに立派なおうちを持ち、妻はデンマーク女性のメットとい

う大変実利的な普通の女性で、もう理想の夫です。日曜日だけピサロというユダヤ人のまじめなおじさまの画家の生徒です。静かなよい絵を描くピサロの眼からみても、よき日曜画家だったと思います。

夫の趣味は絵を描くことだと、そして普段は有能な株式仲買人であると。これはもう言うことない夫だったのですが、ある日突然、もう仕事を辞めて絵を描きたいという。妻の立場としてみれば青天のへきれき、大変困ることだったのですが、実はゴーギャンからすれば、これはすべて、株式仲買人として妻子を立派に養ってきたことの延長として、やはり自分がここで絵を描いて新たにお金を儲けると。

彼はタヒチに行く前にマルティニク島という南の島にも行ってたのですが、まだそのころはフランスからタヒチに行くのは大変なことでしょうから、そういうところで描いた絵だとパリの人にはとても珍しがられて、評判を呼んで、うんとお金が入るだろう。それで妻や子どもに今以上に豊かな生活をさせられるだろう。そういう計算があったわけです。それが現実に行ったところ、株とは違って、大はずれにはずれて、タヒチで描いた絵なんて、個展をしても「何だ、これは」ということで全然顧みられなかった。そこにもうゴーギャンとしての苦しみが始まる。

最初から、もう自分は野蛮人になりたいと思った気持ちも本当ですが、でも、だからといって妻子を捨てる気は全くなかったのです。妻子のためにも自分は思いきりいい絵を描こうと、そういう気持ちを持っていた。そここのところが、やはりだんだんと20世紀に入ってくるに従って、誤解されて、すべてを捨ててタヒチに行った。画家として、芸術家としてはすばらしいあこがれの生き方だけれど、一家庭人としたら最低だと。私もそのように思い込んでいたのですが、そうではなかったのです。

ゴーギャンは、いつもタヒチの青い空と青い海を見ながら、アリーヌという最愛の娘のことを思っていたのです。アリーヌという名前は、ゴーギャンが大好きだったお母さんの名前だったのです。ゴーギャンのお父さんはパリの新聞記者だったのですけれども、お母さんは南米のペルーのリマの総督をしていた人が伯父に当たる、だからお嬢様です。

みんなで小さいゴーギャンを連れて、お母さんはペルーにまで行ったのです。ペルーで総督が亡くなるまで暮らしていた。いい暮らしをしていたと思うのですが、そういうのはばると遠いペルーまで、リマまで行ってたということは、やはりタヒチに行くことも何かその延長で、そんなに辺ぴなところでもなかったけれども、楽園ですけれども、でも、行くことについて、普通のフランスのパリにずっと住んでいる人のような逡巡はなかったかもしれません。

そのアリーヌというお母さんの肖像画も残っています。ゴーギャンは本当にちょっとごっついというか、男臭い。私も古いですね、最近亡くなった日本の俳優さんで丹波哲郎さんのような、私も少女時代に見てましたが、すごく男っぽい感じの方でした。ゴーギャンはああいう感じの人です。だから、もてるのです。でも、ごっついです。

お母様はとても気弱な優しい顔をした女性です。だから、そのお母さんが大好きだったのです。メットとの間に生まれた子どもにアリーヌという、お母さんと同じ名前を付けてかわいがっていたのですが、妻のメットはもう、しょうがない夫だとかんかんになって怒ってデンマークの実家に戻った。

残念ながらメットは芸術へのあこがれのない女性だったのです。これもまた無理からぬことで、自分は稼ぎのいい株式仲買人の妻になったつもりでいたところが、ある日突然、絵を描き出して、タヒチに飛んでいった。しかも、その絵が売れているならともかく、全然売れないということであれば、怒り心頭に達するのです。本当に惜しまれるのは、メットが芸術へのあこがれを持った人であれば、ゴーギャンの絵の良さを見いだす目がある人であれば、「仕方がないわね」とあきらめて心の中で応援する気持ちもあった。もし私がゴーギャンの妻であったら、タヒチまで行ったと思います。

だから、皆さんの中でも、ご主人様が単身赴任でどこか行かれたら、やはりときどきは行かないといけません。単身赴任したら、それはもう男性のほうは大体において、「寂しいでしょう」と言う。「いや、伸び伸びしています」という方が多いですから、気を付けないといけません。自分の夫だけは大丈夫と思ってらっしゃると思うのですが、大丈夫な例が多いと思いますけれども、でも、それはわかりません。

それはそうでしょう。だから、ゴーギャンも、メットがくっついて行けば、「とほほほ」という気持ちはあったかもしれないけれど、それはそれで、メットのこともしっかり家庭も持ってくれる立派な良き妻と思えばこそ、その妻と子のために一生懸命絵を描こうとして頑張っていたわけですけど、メットとしてはもう軽蔑しきっていたわけです。何という夫だと。そして、向こうにもタヒチの肉感的なかわいい女性が、愛人が現れているわけですから、それはもう妻として許せないとお写真で見ても大変堅いまじめな感じの潔癖な方ですから、許せなかったのです。

そして、アリーヌという子がかawaiiそうにデンマークで亡くなってしまうのです。私はよく思うのですが、そういう夫婦仲が悪かったり、三角関係がこじれたりするときに、問題は子どもです。子どもさえいなければいいんですが、子どもという一番罪のない人が犠牲になることがあるのです。犠牲にならない場合もありますけれども、なることがあるのです。

メットにとってもかわいい娘のアリーヌだったと思うのですが、私が思うに、それ以上にゴーギャンは、離れていましたから、アリーヌ、アリーヌと思っていた。そのアリーヌが死んだという知らせをメットはゴーギャンに伝えなかったのです。夫はもうどうしようもないと思って、さっさと自分たちでお葬式をして知らせなかった。月日が相当たってからあと、メットからではなく、風の便りにアリーヌが死んだという知らせがタヒチに来るのです。そのとき、ゴーギャンは絶望して、もう自分は死んだほうがましだと、本当に自殺未遂をしたのです。

私はタヒチには行ったことがないのですが、インドネシアのバリ島には行ったことがあります。南国の花というと私たちはハイビスカスの強烈な赤い花を想像しますが、実は一番代表的なのは白い花です。ゴーギャンの絵をご覧くださいとわかるのですが、白い花を頭に付けている女性がいます。そのアリーヌが死んだときにも、ゴーギャンは白い花をアリーヌに捧げる。これはもうだれよりもアリーヌを思っている自分の心の花だと言って、本当に悲しみます。お父さんとして悲しむのです。

そのときに初めて、それだけの絶望の中で、「私は今とても悲しい。でも、そのとき、この世の中に自分よりもっとかわいそうな男性がいた。それがゴッホだ」と、そのように日記に書いてあります。ゴーギャンもゴッホに対して、致し方ないこととはいえ、あのときは画家になってまだまもなかったし、自分に対する自信も満ちあふれてた。どうしてゴッホに対してもっと優しくできなかっただろうかと。そして、自分が絶望しているときの慰めは、でも僕よりかわいそうな人がこの世にいたんだという、やはりゴッホを最後に思っていた。それは私は非常に心に残るお話です。

でも、ご覧くださいとわかるように、そういう悲しい絶望の中で描かれたゴーギャンの絵は、私の最大の好みではないのですが、やはりゴーギャンにしか描けない絵はタヒチに行って苦しい中から生まれた絵、その中から描いた絵は明るい。ゴーギャンの絵はどこも暗くない。女性もとても力強い。おびえた表情をしていても、タヒチの原色の白い花が描かれていても、生命力にあふれた絵だと思います。

ゴーギャンが日曜画家のときに描いていた絵が京橋のブリヂストン美術館にあります。とても穏やかないい絵ですが、その絵だったらどなたにでも、気だての良い気持ちを持っていれば、絵心があれば描けるわねという絵です。まだ個性がない。それが、タヒチの絵は、あの当時どうしてあれだけの絵が認められなかったか。あまりに異端でありすぎたのです。

ゴーギャンの絵もおうちの額縁に入れて掛けておくにはやはりエネルギーがありすぎるのです。私はゴーギャンの絵はすばらしいと思いますが、あの絵をたとえ絵はがき

でも家で見てみると、ちょっと重たいわねという感じがします。それは好みの問題ですが、やはりルノワールの少女のほうがかわいくて気持ちがいいです。でも、絵として見たら、やはりゴーギャンにしか描けない絵を描いている。苦しみの果てに、妻からも冷たくされ、最愛の娘に死なれて、悲しみの中で描いた絵が、普通であれば息も絶え絶えの絵になっているところが、大作を描いているのです。

だから、画家の幸福というものは、絵を見る側の普通の私たちが思っている幸福とは、もしかしたらやはりずれがあるのでしょうか。どんなに悲しい、暗いけども、絵を描いているときの彼は幸せだったのではないかなと思うのです。やはりゴッホの絵を見てもそれを感じることがあります。ゴッホの絵も、「星月夜」のあのぐるぐるとした、あの絵は私はやはりちょっと苦手なところがあって、彼の精神がわーっと高揚したりしたときのその不安定さが伝わってくる気がするのです。

同じところに描いても、例えば「夜のカフェテラス」は、夜をあんなに明るく描いている画家の絵はほかにあるだろうかと考えます。すぐに浮かんでこない。やはり朝が一番清々しいと思うのですが、夜は落ち着いて、しーんとした、きれいだなと思うけれども、やはり夜のカフェテラスをあれだけ明るく、しかも夜の明るさは、はではでしいものではなくて、本当に落ち着いた明るい絵です。そういう絵を描けたゴッホは、本当は全然狂っているなんていうことはなかったと思うのです。

昨年、オランダのアムステルダムに行きました。司馬遼太郎先生の「街道をゆく」という朝日新聞のムック版のオランダ版で、私がゴッホの旅をさせていただいたものから、そのゴッホのふるさとに行きました。アムステルダムからは割合ありましたが、ニューネンという村があります。そこは日本人はまだそう行ってないんですけども、ゴッホのお父さんは先ほどお話ししましたように牧師さんでしたので、牧師館も残っていますし、ゴッホのアトリエもそのまま残っている村があるのです。そこに行ってきたのです。

とても穏やかないい村です。まるまるとした、大きさを言うとムクドリぐらいですがムクドリのようにくちばしがとがってなくて、むくむくと太った本当にかわいい鳥がいっぱい、地べたを歩いていたたり、ひまわり畑にいます。あまりかわいい鳥なので、オランダのアムスに住んでいる日本人紳士に、「あの鳥は何ですか」とお聞きしたら、「あれはオランダのカラスです」と。私は団地に住んでいて今は安マンションですが、カラスというと、ごみ箱あさりをしている、人相というか鳥相の悪い、くちばしのとがったハシブトガラスしか浮かびません。

このあいだも高校生の娘2人で道を歩いていたら、飯能のカラスは穏やかかもしれ



ませんが、東京のカラスは、世田谷のカラスは殺気立ってしまっていて、隣の人が後ろから突然つつかれた。怖いですね、首のところをつつかれたんです。それは、世田谷辺りもわずかながら残っている雑木林みたいなのを、マンション建てるとかで今切ってますので、追っ払われて、それで殺気立っているんでしょうね。すごく怖かった。隣にいる私まで、髪にカラスのにおいが染み付いているような気がしました。

そういうカラスを思っていたところが、オランダのカラスのかわいいこと、まるまるとして。カラスにもいろんな種類がいるんですね。本間先生はフランスにとってもお詳しい方でいらっしゃいます。オーヴェールでしたよね、絶筆となったと言われていますが、「カラスのいる麦畑」。

私はやはりカラスというと何か不吉なような、不安な気持ちをかき立てながら、ゴッホはピストルで自分のおなかを撃ったのかなと。そうじゃなくて、オーヴェールのカラス、フランスのカラスとオランダのカラスは違うのかもしれませんが。恐らく違うのでしょう。でも、あの懐かしいニューネン村のカラスに囲まれていたときに、もしかしたら、あのふるさとを思い出してうれしい気持ちで死んでいったんじゃないかという気もしたのです。

ということは、実は、ゴッホはとても弟から愛されて大切にされてきましたが、お母さんからはやはり、そういうちょっと変わり者ですからあまりかわいがられてないと。そういうふうここに、信頼すべき本にも書いてあります。だから私もそう思っていたのですが、実はそのニューネン村に行きましたら、牧師の家で貧しく育ったということにもなっているのですが、全然貧しくない、ゴッホの牧師館はとても立派な教会堂でした。

その横が、ここがゴッホのアトリエとして使われていた納屋ですと、そこも見せていただいたのですが、立派なアトリエを持っていた。しかも、ほかの隣村の教会でも彼は絵を描くことがあった。だから、アトリエを一つだけじゃなくて、二つも持っていた。

それを知っても、これはテオだけではなく、家族ぐるみで、この変わった、でも絵がとても上手なゴッホのことを大切に思っていたんだなと。故郷の人がゴッホを冷たく思っていたとか、決してそういうことはなかったんじゃないかと。とても温かく見ていたという、何か私はそういう気がしたのです。

ゴッホもテオへの手紙の中で、確かにお母さんに対してちょっと反抗的な文章を書いているときも、最後には「僕のお父さんとお母さんはすばらしい。あのようにお互いに尊敬し合っている両親はすばらしいと思うよ」と書いています。そういう、テオだけは最大の理解者だったけどあとの家族は冷たかったとか、故郷の人は変人扱いして冷

たかったとか、そういうことも実は真実とちょっとずれているんじゃないかなということ、私はニューネン村に行って感じました。

人間ってそういうことがいっぱいあると思うのです。私もたまたま今、林芙美子さんの評伝を書いています、林芙美子さんという方は非常に誤解の多い人だなと思いました。つい1カ月ぐらい前のある新聞に、林芙美子さんのご主人は天使のような人だった。そして林芙美子さんは天使のような夫に救われたと書かれていました。見出しに「天使のような夫だった」と書いてあったのでびっくりしました。その記者は林さんの小説を、文章をちゃんと読んでないで書かれたのではないか。林さんの文章を、小説を読めば自然にわかってくるものがあります。

夫が理解がない。別れたい。悪い人ではないけども、林芙美子さんが文章を書くことへの尊敬がない。これはやはりつらいことです。「おまえの書くものなんか、たいしたものじゃない」と言い放たれて、すごく自分は傷ついて、「そのとおりかもしれないけど、悲しい」という言葉が書いてあるのです。

今朝の「芋たこなんきん」のご主人様とは違ってしています。ヒロインも頑張って奮闘して、今朝も見ましたが、文章を書きながらあれだけの家庭の世話をするということは至難のことですよ。それはヒロインも偉い。でも、やはりご主人が才能を認めているという姿勢ですよ。「おまえの書くものは、たいしたものじゃない」とか言われたらもう、藤山さんもお怒りになると思うのです。

逆を言えばメットとゴーギャンの関係です。ゴーギャンが一生懸命絵を描いている。それはお金もうけにすぐには結び付かないかもしれないけど、「この人は一生懸命絵を描いている。その姿は尊い」と応援する気持ちを持ったら、また違ったゴーギャンの人生になったかもしれない。また、絵も少し変わっていた可能性もあります。家族ってそういうものですね。

もしも、天使のような人だったら、林芙美子さんは恋多き人でしたが、あんなに恋多き女性にはならなかったと思うのです。そういう決め付け方をやはり人間はしがちですが、今まで私もしてきたように思います。

いろんな問題でもそうですよね。新聞の報道とか、今考えなくてはいけないことがいっぱいあります。北朝鮮がああいう核実験した。でも、その実態はどういうものかということ考えてみれば、とてもとてもそんな、今どの程度の軍備しか持っていないかということは、現実、軍事評論家がおっしゃっていることですが、そんなに問題ないんです。でも、1回実験したからといってすぐ日本を核軍備を持とうというのは、それはとても危険な発言だと思います。

一つのことがあったときに、冷静に「でも、本当はどうなんだろうか」とか、もっと真実を知りたいという、そういう気持ちを持って冷静にすれば、今、6カ国協議の中に北朝鮮も席に着くことになっていきますし、中国との問題ですよ。時には、日本がしゃしゃり出て、いろいろと制裁しなければいけないところもあるだろうし、拉致のご家族のお気持ち考えたら当然です。拉致されたお嬢様のお母様は賢明な方ですから、「制裁をすることで戦争中の日本のように『窮鼠猫をかむ』のような破れかぶれになったら大変です」と。おかわいそうなお立場だけど、おっしゃっているとおりだと思います。

やはり一つのことで、「ああ、そうなんだ。これはけしからん」と思うことはたやすいのですが、やはり考えなくてはいけない。私もとても浅はかな人間ですので、すぐにそういうふうを決めてかかっていることが随分いろんな事柄に多かったと思うのです。絵をじっとみつめると共にゴッホとゴーギャンの生き方を考えて、「ああ、そうだったんだ。こういう悩みを抱えていたんだな」とか、「ゴッホは本当は家族みんなに大切にされていた人なんだ」と。これが真実に近いと思います。

ゴーギャンは家族を大切に思う人だった。これが真実だと思います。それを、「ゴーギャンはけしからん」とか、「ゴッホの家族はテオを除いては意地悪だったじゃないか」とか、そういうふうにすぐに短絡的に決めてしまう・・・。

でき得る限り、私は真実の林さんを書いていきたい。放浪記の森さん、前々回の文化勲章を受章された森光子さんが80歳を過ぎられて、あんなに若々しいというのは、私たちも希望が持てますし、すごくすばらしいことだと思うのですが、それは別にして、菊田一夫さんが書いたあの放浪記は現実の林さんの生き方とは違っているところがあるわけです。

例えば、放浪記の舞台で林さんが一番損しているところがあるとすれば、林さんが意地悪をして預かっていた女性のお友達の作家の原稿を持っていかなかったと。編集者に渡さなかったと。それは同性の意地悪ということになっていますが、あれは菊田さんのフィクションです。放浪記があればロングランで、菊田さんも林芙美子さんに劣らず貧乏で悲しい思いをされ、それをばねに脚本を書いてきたすばらしい劇作家と思いますが、その1点に関してはやはり大いなる誤解を生むことになりました。

林さんはそんな意地悪な人ではないのです。もちろん人間として欠点もあります。川端康成さんも作家としてはすばらしい方だと思うし、私が尊敬している作家の一人ですが、しかし、林さんのお葬式のときに、「この人にも随分痛められた人がいます」ということを、やはり身内の気持ちで川端さんは言われたと思うのですが、あれも誤解される発言だったと思います。

どうしてそういうことを言われてしまったのか。欠点が多いということと言ったのは、そのときに、お葬式にほかの女流作家がいたわけです。真杉静枝さんとか、今はもう読まれることもなくなった人ですが、当時は勢いのある方だったのです。そういう方たちがお葬式の席で、これからみんなで林さんの悪口を言おうじゃないのとお葬式、告別式の日になんかそういうことを発言すること自体、私はその女性の作家に首を傾げるのです。

それはやはり、林さんのお葬式に二重、三重のすごい、今日の「芋たこなんきん」でサイン会場が満員だったように、いっぱいの人が集まっていたのです。林さんの小説はやはり庶民の悲しみ、戦時中の一市井の人の目線で書いたものです。高見から書いている小説は一つもないです。だから、私たちが読んで一読者として共感するのです。私のような戦後生まれの人間が読んでも、「ああ、戦争中の日本人ってこうだったのか。敗戦の焼け跡・闇市派で生活していると、こういう会話が合った。こういう気持ちになっていたんだな」ということがすぐわかるのです。

やはりあれだけリアリティーあふれる、敗戦というものが日本人にとって何だったんだろうということを一庶民の目線で書いた作品は、私は不勉強ですから読んでいない作品もいっぱいあるのですが、私の読んだ限りでは林さんが最高です。あれだけの見事な作品を書けば、みんな普通の人たちが共感する。林さんは普通の人ですから、普通の人として戦争というものを見つめていた。でも、普通の人の中でやはり戦争で日本が勝つと思い込んでいた方もいたわけです。でも、思い込ませたのは、その方の責任とは思わない。そのときの日本の軍部がそういうふうに、「日本が勝つ、勝つ」と言って、文化人の多くもそういう先棒を担ぐような文章を書いてました。書いてない方もいたんですけども、それはごくごく少数派で寂しいですね。

林さんは太平洋戦争が12月8日始まったときも沈黙しています。あのときに、本当に何というたくさんの作家が興奮したことでしょう。太宰治という人もその一人でした。やはり、「米英」は憎たらしいと、ああいう言葉を吐き捨てていたかということですよ。そのとき、林さんは沈黙していたのです。文化人で、もし勝つ見込みがない戦争とわかっていたならば難しかったでしょうけど、せめて沈黙していただきたかったと思います。

そのときに沈黙した林さんは、決して戦争協力者でも何でもないので、たまたま日中戦争の漢口一番乗りしたときに、女で漢口一番乗りしたということで、戦争協力者と言われて、今でもそういう目で見られているけども、現実は違うのです。

どう違うかということは、私はもう2年がかりで連載してますので自信を持って、私

は林芙美子の真実を書いているという自負があります。そして、それを書きながら思うことは、「ああ、人間ってほかの人間をこんなにも誤解したり勘違いするものですね」。寂しいですよ。自分が誤解されたらどんなに寂しいだろうかと。

林さんの偉いところは、林さんは生きてるときから、ねたまれたりすることもあっても、私だったら「いや、そんなこと違います」とむきになって言いたいところだし、「ご主人様に尽くされて尽くされてお幸せですね」と言われたとしたら、「いや、違うんです」と言っていたような気がします、親しい間柄の人に対して。でも、夫の緑敏の悪口は言っていない。だから、偉い人だなと思う。しかし、文章の中では正直に書いてしまっているのです。きちんと林さんの文章さえ読めばはっきりわかることを、何で「天使のような夫」と書かなくてはいけないのかと思います。

そういうことは非常によくあることなのです。特に芸術家というものは、みんな生き方に興味を持っていますから、ある一面だけを見てこうだなんて決め付けられるものではないです。芸術家だけではなく、私たち普通に生きていてもそうですよね。あるときには、とても和やかな、今日、飯能に来て気分がいいとにっこりしますけども、今日が大雨であったら、せっかくの山も見えないでしょうし、気持ちがちょっと沈んで私がうつむいている顔を見たら、やはり暗い人だったとか、そういうことになります。そんなもの、いつときの表情とかいつときのその人でその人のすべてを決め付けてはいけません。

絵でもそうです。ゴッホの絵も、クレラー・ミュラー美術館と言って、オランダとドイツ国境の森の中にとってもきれいな美術館があるのです。みんなそこでは森林浴をしながら、絵を見に来るのです。私は、絵というのは、本来、そのように自然なスタイルで見に行くところではないかと思うのです。

うちの母も働くおかあさんでした。寮母をしてまして、ミレーが好きだったのです。本当はいけないんですけども、東京に住んでましたので、「今日、ミレー展あるから急いでいきましょう」と。「でも、こんな普段着だからちょっと着替えするわ」と言ったら、「いいのよ、ミレーはエプロン姿で見れる絵なのよ」といいました。それで本当に大急ぎで絵だけ見て、寮母ですから、さっと帰ってきて夕方のお買い物をしてました。

絵ってそういう身近な、普通の人と出会うように、近所におつかいにいくような気持ちで身近に感じられる絵が最高だと私は思います。きちんとかしこまって見る絵もあるかもしれないけれど、そういうおしゃれをして美術館に行くという楽しみもありますから。その一方でもっとラフでいいんじゃないかなと思います。

私は今、ゴッホとゴーギャンについてお話ししました。やはり、「私はこの一枚」とい



う絵が皆様もおありではないかと思います。私のこの一枚は、どうかなと思っているのですが、ここに4枚絵があります。先ほど本間先生からこの「恋する手」という講談社から出た本のこともご紹介いただいたと思いますが、これは竹久夢二の「黒船屋」という絵です。

この絵にご注目いただきたいのですが、この本もとても面白いし、ためになると思いますので、ぜひ。売れない文章書きで、本当に私も文章を書くだけで、はっきり言って生活はできないです。いろいろカルチャーセンターとから、今日も本間先生からお声をかけていただいたりして、こういうことで本当に水商売だなと思っています。本当に明日がわからないのです。ある意味で、その気楽さがあります。でも、結構いつでも常に断崖絶壁なんです。

この絵のすばらしさは、手の大きさだと思います。これはデフォルメされてますけれども、本当にこの人は蒲柳の質の人です。彦乃さんと言って、私はやはり夢二が一番好きだった女性は、この当時、女子美術学校の学生だった彦乃さんだと思うのです。どうしてかというと、彦乃さんはすごく優しくかったことと、夢二の絵が好きだったのです。これがやはりゴーギャンの奥さんにはないものです。

そのあと、お葉さんという大変きれいな秋田美人の人が現れますが、夢二の絵の雰囲気ぴったりののはこの彦乃さんです。お葉さんは妖艶な女性ですから、夢二の絵とはまたちょっと雰囲気が違うと思うのです。彦乃さんのいじらしさ、そのいじらしい彦乃さんに抱きしめられているこの黒猫が私は夢二だと思うのです。だから、夢二という人もすごく女性にすがりつきたい。そういう男性っているのです。

私も父の顔を見ることなく、父とはこの世ですれ違いですし、愛人の娘ですし、抱かれたということがなかったので、ある種ファザコンで、男性に頼りたい。犬で言えば、今でもそうですけど、セントバーナードかゴールデン・レトリバー、盲導犬ですね。だから、普段は穏やかにして、いよいよのときだけ「ワン」とほえる。普段からヒステリー系のもいますよね。ワンワンほえる。男性にワンワンほえられると、がっくりします。私は割合に、あまりほえないつもりでいるものですから、やはり盲導犬に引かれます。

もし、夢二さんのような黒猫のような男性にすがり付かれると、ちょっと震えると思うのです。それだけ包容力がない女です。だけど、本来、彦乃さんは蒲柳の質なのに、やはり心の包容力は夢二に対してはすばらしいものがあったというのが、このデフォルメされた大きい手に現れていると思うのです。

この大きい手でひしと抱きしめる。これはやはり母の手だと思います。私が夢二の絵の中でこれが一番好きなのは、ここです。この足もどっしりと大きいです。かわいそう

に、中国では纏足とか言って、足を成長させないように小さくしていた。そういうのはやはりつらい悲しいお話ですよ。この足も堂々と素足で、大きい足に描かれています。これは、ゴーギャンの「かぐわしき大地」という大原美術館にある絵でもそうですが、女性がすごくたくましくしっかりと大地に足を踏みしめて踏ん張っている。これはやはり母の踏ん張りだと思うのです。実際は、彦乃さんはこの絵が描かれて1年後に肺病のため亡くなって、それからあと、夢二はとても心がふさがれて生き方も投げやりなところが出てまいります。残念なことでした。

この絵が輝いて見えるのは、もし手や足が細く小さく描かれていたら、この絵の魅力はないと思います。この絵は図らずも熊のような大きい手です。本来あり得ないことです。こんなやせた細い少女の手がこんな熊のような手であるはずないけど、そこは絵ですから、大きい手に描いたのです。しっかり抱きしめられたいというこの願望。

私は、そういう盲導犬の頭なでていたいとか、そばに寄り添っていたいという感じでしたから、自分が抱きしめるということはあまり思ってませんでした。やはりそれがないとだめですね。本当の恋愛にはなりません。私の手は細いし、あまり良くないと自分でも、母からもよく注意されていました。

山と川がありますね。今日もなだらかな飯能のよき山を見ました。夢二は、結局、彦乃さんとの交際を彦乃さんのお父さんに反対された。それは反対して当然だと思います。画家でふらふらとした感じだし、彦乃さんはお嬢様です。秘密に山と川という、それぞれそういう名前で手紙を交換した。その場合、普通、山というと男性かなと漠然と思っていたら、山が彦乃さんで川が夢二だったのです。よくよく考えてみると、山の神と言われるように女性はどっしりと落ち着いて、山懷に抱かれるという言葉があるように包容しなければいけないわけです。それで山・川と呼んでいた。

こちらに上村松園の「母子」という絵があります。この絵はモノクロになったのでわからないので、もしご興味ある方は画集で見たいんですが、このお母さんも、とても柔らかな、温かな手をしているのです。これは松園さんが59歳のときに描かれた絵です。

松園さん自身も、宮尾登美子さんが新聞連載された小説もありますけども、とても悩み深い未婚の母になりました。鳥ばかり描いてらっしゃった松篁画伯のお母さんになられたのです。ずっと父親のほうの名は伏せてらっしゃいました。でも、松年さんというお師匠さんがどうやらお父さんだったらしいのです。宮尾さんは非常に女の情念を描くことにたけた方ですから、その情念の部分で小説を書いてらっしゃいますが、現実松園さんは大変上品な方だったと思います。

井上靖さんが晩年の上村松園さんにお会いになって、そのとき、井上靖さんは毎日新聞の美術記者だったのです。お願いごとで伺ったときに、お断りになられたそうなのです。本来お断りされるということは、どのような事情があれやはり寂しいものですが、そのときに、松園さんはふすまをぶっと開けてお辞儀して「本当に誠に申しわけございません」と。そのお辞儀をするときの松園さんが大変に上品な手弱女で美しい方だと書いていらっしゃる。世の中にこんな美しい女性を初めて見るような思いだったというように。そういう上品な方ですから、情欲うんぬんということはないと思います。実際に井上さんはお会いになってらっしゃるわけですから、その目は正しいと思います。

そういう松園さんでも、やはり女として苦しいときがありで、お師匠さんの松年先生が亡くなったときに、自分はお葬式にも呼ばれなかった。それは愛人の立場としては悲しいことですね。そのときのもうやるせない、やりきれない気持ち。「源氏物語」の葵の上という嫉妬に狂った女性、着物にはクモの巣が張っているんです。怖いんですね。そういう心を着物の柄で表現しているわけです。その葵の上の絵を描かれた時期もあったのです。

松園女史は生まれたときからずっと母の手一つで育てられたお嬢さんなんです。京都のお茶屋さん。私は昔からお茶屋さんにあこがれていました。日本茶は清潔な感じがするでしょう。私の小学校のころあった。今、そういうお茶さんは飯能にあるかしら。少しずつお茶を出して何分とか量るのです。お茶屋さんに行くと、ぶんとお茶のいいにおいがして、必ずお花の一輪挿しがあって、とても清潔です。そして、そのお茶屋さんの奥さんはまた本当に身ぎれいな、清潔なお化粧一つない方でしたけれども、本当にきりりと松園の絵の中から出てくるような清潔さのある方でした。

スーパーでお茶を買うのも便利でいいですけど。私も買いますが。ここは狭山茶が近いんですね。私も狭山茶は大好きです。お茶はとても清潔な感じがします。茶畑を見ている、そういう感じがします。

そういうところで松園さんは育てられて、お母さんが松園の絵の才能を認めて、絵を描いていた方です。そのお母さんが、松園さんが59歳になったときのこの絵を描く1年か2年前にお亡くなりになられたのです。松園さんにとってとても寂しいけれども、自分も59歳になって恐らくお孫さんもできておられたと思います。自分がお母さんの手で育てられた、お父さんを知らずに育ったという点においては私と同じです。

お父さんは、大塩平八郎の乱ってありますが、その大塩平八郎の血筋を引く方だったんですが、病死されました。お母さんのことを大切に思う気持ちと、自分がやはり未婚の母とはいえ、これは明らかに男の子ですね。初めて男の子を授かったときの喜び。母と

しての喜びが出て、ふくよかないい絵を描かれた。だから、松園さんも晩年、これから20年近く生きられるわけですが、年を取られるごとにいい絵を描かれるようになったのです。これはすばらしいことです。

日本画家の中にも、洋画家の中にも、若いときにはいい絵を描いていたのに、だんだんとお金持ちになられると、絵の緊張感というのはどうでしょうか。文士、小説でもそういうところがあると思うのですが、やはり緊張感が必要なものです。どんなに幸せな恵まれた立場にいたとしても、文章を書いたり、絵を描くときには、緊張感が必要なのだと思います。

松園さんは十分立派な絵を50代まで描いてらっしゃったけど、もっと今よりましな絵を描く勉強をしたいという気持ちを持ち続けていれば、その方はどんなに立場がよしくなられても、いい絵を描いていかれると思います。司馬遼太郎先生は文化勲章を受章されたときに、「こんなものはもう明日から忘れます。私はこれからも生涯一書生で文章を書いていきます」と。いいお言葉ですね、生涯一書生。生涯、ずっと1人の勉強する学生でありたいと。司馬先生はそういう方でした。

結局、上村松園さんも、そういう気持ちになられたのでしょうかね。戦時中にいろんな絵を描いてらっしゃるんです。太平洋戦争のころというと、日本画家でも従軍画家として猛々しい絵を描かざるを得ない。そういう立場に追い込まれた方もいるし、自らの今を描きたいという気持ちから戦争画を描いた方もいるのです。

そういう中で、上村松園さんは、立場としては一応当時の言葉では、銃後を守る母という立場がおありだったかもしれないけども、その戦争一色の中で、薄明かりの夕暮れどきになって昔の時代の女性を描いてました。松園さんは母を思いつつ描いています。障子を開けて、障子の中でほの暗くなってきてから、針の糸の目を通すときに、もう夕暮れですから、外のほうが中よりも明るいわけです。ふすま越しに針を持って、糸をこう通してる絵。すばらしいです。司馬遼太郎先生が、上村松園女史は上品な方ですとおっしゃっていました。絵を見ればわかります。母の姿を描いている。働くお母さんの絵を描いている。

私は針を持つのが苦手で、料理をするのはこれでも結構好きで、意外と上手で割合手際はいいほうだと思ってますけど、掃除と裁縫は苦手。昨日久しぶりに針を持ったら、気分いいものですね。いったんその気になると楽しくできるんですね。ミシンは苦手です。機械ものはもっと苦手。今でも原稿は手書きです。鉛筆と消しゴムで書いてますので、時代遅れでご迷惑をお掛けしています。

針も、こういうふうにして絵で見るとすごく共感するのです。そういう絵を戦時中に、

猛々しい絵がいっぱいのときに、日常を大切にする、日本の暮らしを大切にする絵を描いた松園さんは立派だと思います。時流に乗ることはたやすいです。でも、時流が終わったあとのむなしさ、時流に自分が乗ったことを忘れたふりをしている文化人もいっぱいいます。

本来、芸術というものは権力の反対側にあるものだと私は思っています。ジャーナリストもマスコミもそうであるべきものなのですが、どうもこのごろそうではないですね。残念なことです。反権力というのは、結局、芸術家というのはアウトサイダーだということです。そうすると、アウトサイダーで歩いていると、かえって普通のまともなことの中の美しさもはっきりとみえてくる。普通の美しさがわかるのだと思います

私はモナリザも大いに誤解されている女性だと思います。モナリザの絵は冷たい。何がこんな、たいしたことないんじゃないか。眉毛もないのが何が美人だとか。そういうことを言うからデュシャンのような現代画家がひげを描いたりする。結局、それは反権力の気持ちもあると思います。

でも、私はモナリザをあえて弁護するならば、お顔立ちではなくて、この手をご覧あれと。この手は柔らかくふっくらとしているのです。やはりお母さんの温かな手です。モナリザはレオナルド・ダ・ヴィンチの自画像と言われていますが、実はこれはダ・ヴィンチを生んだ母ではないかと私は思っています。

ダ・ヴィンチは育ての母に育てられまして、生んだ母は10代の若いときに引き離されていたとか、もう別れていたのです。ダ・ヴィンチがこの絵を描いたところに訪ねてきているのです。そのときに、やはりダ・ヴィンチも複雑な思いがあったと思うので、この顔の微笑はとても複雑ですよ。決して明るい顔とも思えません。だから、寂しい。自分で抱っこして育てなかったのです。その悲しみがあるけど、この手はお母さんの手だと思います。ダ・ヴィンチを訪ねてきたということは、やはりダ・ヴィンチを抱きしめたかったんだという、そういう思いが、この二律背反がモナリザにはあると思います。

ですから、「あの人は冷たい」とか、「あの人は意地悪じゃないか」、「何かきつそうな人ね」とか、私もよくそういうふうになんか決め付けて、内心想っていたりすることもあります。そういう人のほうが逆に芯のある、実のあることもあるのですが、人は見かけではわかりません。フーテンの寅さんはすばらしいけど、じゃ寅さんのように腹巻をした人がみんないい人とも限らないわけですから、それはわかりません。

絵も、一度見て嫌いと思わずに、もう一度、二度、三度見たら思わぬ発見があることがありますので、ぜひそういうふうじつくりと絵を見て、絵は心の鏡で折々によって違って見えることがありますので、それだけ人間との出会いとも重なっていきます。ど



うぞこれからも絵を見つめていらしてくださいませ。どうもありがとうございました。

